

平成29年度 主題研究(研究の概要)

平成29年6月8日
主題研究推進委員会

I 研究主題

地域の自然や人的資源を生かした総合的な学習の時間の実践的研究

II 主題設定の理由

1 現代社会の要請から

近年の国際学力調査（PISA 調査及び TIMSS 調査）の結果から、我が国の学力問題が提起されている。PISA 調査では「知識や技能等を、実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるか」（知識活用力）を重視し、読解力の他にも、数学的リテラシー、科学的リテラシー、問題解決力について調査している。全体を通して、論述形式の設問や実生活に関する設問で得点が低い。TIMSS 調査でも、算数・数学、理科の学力調査とは言え、様々な現代的課題や身近な生活体験、環境問題等に関する設問が多いが、全体を通して得点が低下している。いずれの調査でも、我が国の子どもたちの学ぶ意欲や学習習慣の低下が問題になっている。

また、国際社会で生き抜く上で必要とされるスキルとして21世紀型スキルがある。その内容や評価方法を検討するATC21s（Assessment and Teaching of 21st Century Skills）という組織が定義している21世紀型スキルは、「思考の方法 ①創造力とイノベーション②批判的思考、問題解決、意思決定③学びの学習、メタ認知」「仕事の方法 ④コミュニケーション⑤コラボレーション」「仕事のツール ⑥情報リテラシー⑦情報通信技術（ICT）に関するリテラシー」「社会生活 ⑧地域と国際社会での市民性⑨人生とキャリア設計⑩個人と社会における責任」の4カテゴリ10項目となっている。

このように国際的な様々な取組からも子どもたちに求められている21世紀型の学力は、実社会で活用できる能力であり、思考力・判断力・表現力等の能力である。その育成のためには、受動型の教育から探究型の教育へ転換が必須であり、各教科での習得や活用と生活科や総合的な学習の時間の体験を通じた探究が一層で重要であると考えられる。

2 学習指導要領の趣旨から

平成28年8月26日に中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会において示された「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」では、新しい学習指導要領等の理念を、「社会に開かれた教育課程」の実現を通じて子供たちに必要な資質・能力を育成することと整理されている。また、「社会に開かれた教育課程」を実現するために、「アクティブ・ラーニング」の重要性についても提起されている。ここでは、「社会に開かれた教育課程」についての重要点が次のように述べられていた。

- ・ 社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会をとという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。
 - ・ これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育てていくこと。
 - ・ 教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。
- さらに、「アクティブ・ラーニング」に関しては、子供たちの「主体的・対話的で深い学び」を実

現するために共有すべき授業改善の視点として、その位置付けが明確に示された上で、「主体的・対話的で深い学び」の具体的内容が次のように整理されている。

- ・ 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。
- ・ 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。
- ・ 各教科等で習得した概念や考え方を活用した「見方・考え方」を働かせ、問いを見いだして解決したり、自己の考えを形成し表したり、思いを基に構想、創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

以上のことを踏まえた授業改善が今後、学校教育において求められることとなる。

ところで、「思考ツール」の有効性について、田村学（2015）が、次期学習指導要領改訂の最大のキー・ワードは、「アクティブ・ラーニング」であると指摘した上で、子供が自ら課題の解決に向けて学ぶアクティブ・ラーニングを実現するには、探究のプロセス（①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現）を意識することがポイントとなる。この四つのプロセスの中でもとりわけ難易度が高いのが、「①課題の設定」「③整理・分析」である。なぜなら、この二つはなかなか授業としてイメージしにくく、実現も難しい。この難易度が高い場面で、「思考ツール」が活躍すると述べている。

そこで、本研究では、次期学習指導要領の改訂に向けて提起された「アクティブ・ラーニング」の視点を踏まえ、地域の自然を生かした総合的な学習の時間のカリキュラム開発及び「思考ツール」を活用した総合的な学習の時間の指導を推進することにした。

3 本校の学校教育目標から

本校の教育目標は、「心身ともに健康で体・徳・知の調和のとれた自主的で実行力のある児童の育成」である。学習においては、児童が自らの力で、または他者と協力しながら、全力で問題解決に向けて取り組む姿を目指している。このような姿を具現化するためには、児童が心を揺さぶられ、「～せずにはいられない」と思わせるような「価値ある体験活動」を仕組むことが大切であると考ええる。

本校校区には、大蔵川を中心とした豊かな自然環境と、古くからこの地に住む人々によって脈々と受け継がれてきた歴史と文化がある。総合的な学習の時間の学習は、このような地域の自然・歴史・文化等を教材化することで、「価値ある体験活動」を展開することができる。

そこで、地域を学びのフィールドとし、児童の思いや願いに沿った単元構成や体験を通じた学習活動を充実させることを通して、児童の「確かな学び」やシビックプライドの醸成を図っていきたいと考えた。

4 本校児童の実態から

本校において、平成28年度まで3期にわたって取り組んできたオンリーワン事業における研究の取組から、以下のような児童の姿が明らかになっている。

〈児童のよい変容から〉

- ・ 大蔵プランを基に、前学年で学習してきたこととのつながりや他教科等との関連を明確にして学習に取り組んだ結果、児童は生活科や総合的な学習の時間の学習を「楽しい」と感じている。さらに、他教科での学習に「役に立った」と感じている児童が多い。
- ・ コミュニケーションを軸とした活動を通して、友達のよいところに気付いたり、コミュニケーションによってお互いの気付きを共有することで、活動の中でいろいろなことを見付けたり、気付いたりできている。また、各教科等での言語活動を生かした話合いや発信の場を探究の過程の中に位置付けた結果、思考力や言葉の力の高まりを実感している児童も多い。

- ・ 多面的に児童の相互評価を行ったことにより、「できることが増えた」「協同して活動や発表することができ、考えを広げることにつながった」と多くの児童が感じている。
- ・ 児童がまちづくりの在り方を地域の一員として考え発信し、地域の方から評価されることで満足感や成就感を味わうことができている。その結果、地域に対する愛情と誇りを深め、今後もまちづくりに参画していこうとする意欲をもつ姿が見られる。
- ・ 児童は大蔵を学びの場とした探究的な学習を通して、大蔵のまちを見つめ直し、よさや特色に気付いたり、理解を深めたりしながら、大蔵の人・もの・こと・自然に愛情を深め、大切にしていこうとする気持ちをもつことができるようになってきた。

《児童の課題から》

- ・ 身近な事象に対して疑問を抱き、その疑問を既習の知識や技能を用いて解決しようとする姿勢はまだ十分に見られない。
- ・ 児童は、総合的な学習の時間に対する関心や学習意欲が高く、これまでの学習経験からある程度問題解決するための方法も身に付けてきている。
- ・ また、問題解決の一助となるためのポートフォリオで学びの足あと記録し、自分でこれまでの学習を振り返ることができてきている。
- ・ 学習に対する意欲はあるものの、学習したことを言語によって整理・分類したり、相手に分かり易く効果的に表現したり意見を伝えたりする力が十分に育っていない。
- ・ 学びの足あとであるポートフォリオの作成をしてはしているものの、それを十分に次の学びに生かすところまでは至っていない。
- ・ 総合的な学習の時間に対する興味・関心は個人差が大きく、自分の思いがもてず学習意欲が持続しない児童もいる。
- ・ 他教科等で学習して身に付けた力や見方・考え方を総合的な学習の時間の活動に生かせていない児童もいる。また、総合的な学習の時間で身に付けた力を他教科等で、同様に生かせていない児童もいる。

これらの児童の実態から、児童に確かな学力を身に付けるためには総合的な学習の時間で身近な地域の人・もの・こと・自然を学習素材として何度も繰り返し関わり、課題追究の場を多く仕組むことによって、自ら問題解決する思考力・判断力をさらに高めることができるのではないかと考えられる。また、総合的な学習の時間と他教科等の学習内容の関連を明確にすることで、児童に身に付けさせたい力が明確になり、身に付けた力が、相互の学び合いでより生かされることで確かな学力を身に付けることができると考える。さらには、得られた情報や児童の学びをワーキングポートフォリオに示すことにより、児童の情報活用能力やコミュニケーション能力など問題解決に必要とされる力を身に付けることができると考える。そして、問題解決や探究活動を協同して行う学習活動を行う中で、自分の考えを明確にし、話し合いに臨み、自分の考えを伝えていくツールを使いながら情報を整理・分類することで、より考えを生かし合い深め合う学習活動になると考える。

5 地域の課題から

本校の校区の人口は年々減少し、人口構成は65才以上の高齢者率は約44%を占めている。さらに、14才以下の子どもの人口比は約8%で、大蔵校区の高齢者率は、日本の今後の姿を先行している。そのため子ども会が無くなるなど、地域の絆の希薄化が進んでいることが喫緊の課題となっている。

校区の中央に大蔵川が流れ、東西は丘陵地となっている。川を中心に自然が大変豊かであるが、地形的には80%が急傾斜地であり、急坂や狭い道等で前述の高齢化と重なって、高齢者の引きこもりが増加しているという課題がある。さらに、交通の便もよいとは言えず、タクシーも通れなく買い物が困難であったり、長い坂や石の階段が多く消防車が近くまで来られないところがあったりすること

も課題となっている。

これらの課題の解決のため、地域では「地域のことは、地域で考え、解決する」をコンセプトとして様々な取組を行っている。特に、小学校は、地域の様々な関係機関・組織の中心に位置付けられ、地域の方がゲストティーチャーとして積極的に関わってくださっている。また、地域の方々の学びの場としても機能している。地域では、「幼老が社会（地域）の真ん中で暮らす」ことを目指し、生活科や総合的な学習の時間の学習との連携を深めたり、大蔵ウェルクラブの実施等、次の世代の地域福祉の担い手となる児童を育成していく取組を進めたりしている。

そこで、地域の課題やよさを教材化し、児童が体験活動を通して探究的・協同的な学習を進めることは、地域の課題の解決と願いの実現に向け、地域の一員として主体的に行動していこうとする力を高めることにつながり、地域のニーズに応えることになると考える。

Ⅲ 研究の目的

新しい学習指導要領等の理念が、「社会に開かれた教育課程」の実現を通じて子供たちに必要な資質・能力を育成することと整理されている。また、「社会に開かれた教育課程」を実現するために、「アクティブ・ラーニング」の重要性についても提起されている。

そこで、本研究では、次期学習指導要領の改訂に向けて提起された「アクティブ・ラーニング」の視点を踏まえ、地域の自然を生かした総合的な学習の時間のカリキュラム開発及び思考ツールを活用した授業についての実践指針を提示することを目的として取り組むことにした。

Ⅳ. 研究の年次計画

年次計画

年次	第1年次（平成29年度）	第2年次（平成30年度）	第3年次（平成31年度）
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の実態調査 ・1単元70時間の単元構成の見直しと新カリキュラムの検討、新カリキュラムに基づく試行的実践 ・「アクティブ・ラーニング」の視点を踏まえた探究的な学習を一層充実させるための指導方法の検討とその実践 ・他教科等との関連を重視した指導計画の作成と実践 ・学習指導案形式の見直しと新指導案形式による授業の実践 ・児童の実態（変容）調査 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の実態調査 ・新カリキュラムに基づく授業の実践とカリキュラムの修正 ・情報活用能力やコミュニケーション能力を高める指導の実践 ・「アクティブ・ラーニング」の視点を踏まえた考えを深め合い、生かし合う場の指導の工夫と授業の実践 ・ポートフォリオを効果的に活用する授業の実践 ・他教科等との関連を重視した授業の実践 ・児童の実態（変容）調査 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の実態調査 ・新カリキュラムに基づく授業の実践とカリキュラムの評価・情報活用能力やコミュニケーション能力を高める指導の改善 ・「アクティブ・ラーニング」の視点を踏まえた考えを深め合い、生かし合うための思考ツールを活用した指導の工夫とその改善 ・ポートフォリオを効果的に活用する授業の改善 ・他教科等との関連を重視した授業の実践とその評価 ・児童の実態（変容）調査

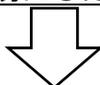
V. 第1年次（本年度）の研究

1 研究の重点

- ① 地域を愛する心を育てる。大蔵のまちのよさを再認識する単元構成。
- ② 既習か未習を明確にするための年間のカリキュラムの作成と実践・評価。
- ③ 情報活用能力やコミュニケーション能力を高めることにつながる、考えを深め合い、生かし合う場の設定。

2 研究の着眼点と具体的な手立て

児童相互の学び合いや生かし合いを大切にしながら探究的な学習を充実させるために

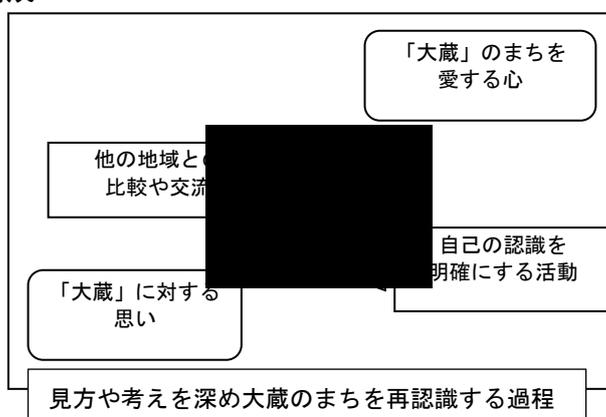


① 大蔵のまちを愛し、学ぶ力を育てる指導計画

(ア) 大蔵のまちのよさを再認識するための単元構成

児童が大蔵のまちのよさを再認識し、地域を愛することができるようにするために、大蔵の地域の人・もの・こと・自然を教材とした単元展開を行う。その際、児童自身が、その領域における自分の認識を明確にすることができる導入での活動を行ったり、他の地域と交流を行う活動を位置付けたりすることを通して、これまでもっていた見方や考え方を深めることができるようにする。

また、学年間・教科間での関連を明確にした実践を行うことができるようにするために、総合的な学習の時間で育てる子どもの思考を明確にする。

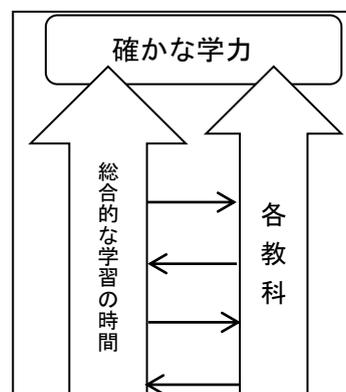


(イ) 確かな学力を身に付ける他教科との関連を明確にしたカリキュラムの作成

総合的な学習の時間が他教科の活用や補完の場となり、確かな学力を身に付けることができるようにするために、他教科との関連を明確にした年間のカリキュラムを作成し、総合的な学習の時間を学習する段階で、関連のある他教科で学習した内容が既習か未習かを明らかにする。

さらに、その単元への関連が、単元の内容と関連するような内容的側面をもつものか、思考ツールの活用と関連するような方法的側面をもつものかを明確にする。そうすることで、活用できる場面において学習内容のおさえなおしをし、さらなる習熟を図ることができるようにする。

教師が意図的にこのカリキュラムを実践していくことを通して、総合的な学習の時間の実践をより効果的にし、確かな学力を児童に身に付けさせることにつながっていくと考えられる。



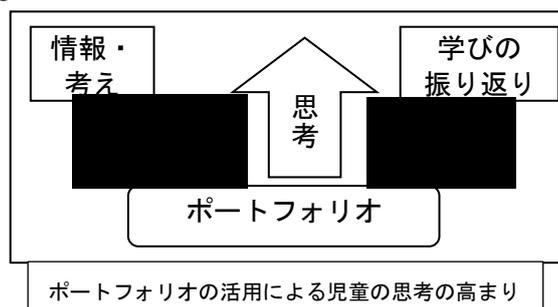
確かな学力を身に付けさせるための総合的な学習の時間と他教科との関連

② 探究的な学習を一層充実させるための指導法を検討し実践する

(ア) 情報活用能力やコミュニケーション能力を高める

ためのポートフォリオの活用

調べた情報や、これまでの自分の考えなどを活用し、主体的に話し合い活動や交流・実践を行うことができるようにするために、総合ファイルを用意し、ワーキングポートフォリオとして活用する。さらに、そのポートフォリオに、探究のプロセスごとの自己評価を行ったものを付加したり、



地域の人材についての資料を挿入したり，思考ツールを活用したりしていくことで，児童の思考の深化や発信の基盤とする。

また，現在の学びが総合的な学習の時間のどの過程におけるものであるのかを振り返ることができるようにするために，学習時に探究のプロセスを示したパネルを提示したり，学びの足あとを随時更新したりしながら残していくようにする。このことを通して，思考の連続を重視しながら総合的な学習の時間を充実させていく。

(イ) 考えを深め合い，生かし合うための思考ツールの活用

児童が，得た情報や考えを，整理・分析することができるようにするために，思考ツールを活用する。また，この思考ツールを生かして，個人思考，集団思考の場を設定する。その過程の中で整理・分析された情報や考えから得られた新たな事実とは何かを明確にし，学習に活用することで，考えを深め，生かし合うことができるようにしながら総合的な学習の時間をより一層充実させていく。

VI 研究計画

1. 研究の内容

(1) 授業研究会（総合的な学習の時間・生活科）

① コア・スクール授業公開 4 実践

10月20日(金) 3・4・5・6年各1学級 参加型の協議会を予定

② 校内研A研 3 実践(講師招聘)

1年又は2年1本(生活科)・3年又は4年1本(総合的な学習の時間)・若竹(自立等)

③ 校内研B研 3 実践

1年又は2年1本(生活科)・3年・4年各1学級(総合的な学習の時間)

(2) 学年(近接学年)研究会

① 研究の重点の検討

┌ 新カリキュラムの評価
├ 探究的な活動の充実
└ 教科等との関連の明確化

② 指導案の作成と事前の検討(予定)

※ 教案検討会…イ 授業実践2週間前(B研)

ロ 第1回 7月〇〇日 第2回 8月〇〇日(コア・スクール授業)

③ 児童の実態調査 1回目 6月 2回目 11月

④ 実践の検討・評価

(3) 研究のまとめ

① 実践のまとめ(各学年)

② 次年次に向けての課題と研究計画の作成(年度末)

(4) 授業予定日について(水曜日を抜粋)

○ A研は、水曜日を軸に講師を招聘する(変更の場合あり)

○ B研は、A研やコア・スクールの日程を勘案して設定する。

< 研究組織図 >

主題研究企画部

校長・教頭 ← 教務主任・総合的な学習主任・生活科主任 ※起案, 1次検討

主題推進委員会

校長 教頭 教務主任

総合的な学習の時間部

松永 原田和

生活科部

武谷 藤野, 原田陽 (生活単元)

※2次検討 指導案検討, 研究について

全教職員

※ 主題研日程

- ・コア・スクール授業者 10月20日 4学年公開
3・4・5・6学年 各1学級
- ・A研修 (低) (中) (若竹)
- ・B研修 (低) (中×2)

A研修は講師を招聘予定, 指導案検討は授業実施の2週間前,

※ 主題研修に関わる日程 (検討会等)

- ・6月2日 指導第一課 豊田剛俊指導主事 (理論研修, 講話)
- ・単元引継について, 随時早めに。
- ・第1回目単元検討 6月下旬 (講師招聘予定)
- ・コア・スクール指導案検討会 前期7月〇〇日 後期8月〇〇日 (講師招聘予定)

・**児童の実態調査** (6月) に行う予定…全国学力状況調査の質問紙を中心にアンケート調査を実施

・**他教科等との関連を重視した授業の実践とその評価** (昨年度からの継続内容)

課題の設定 ⇒ 情報収集 ⇒ 整理・分析 ⇒ まとめ, 表現

・**情報活用能力やコミュニケーション能力を高める指導の改善** (昨年度から継続)

- ・・・探究的・協働的に学び合うために昨年度まで用いた、コミュニケーション能力を高めるための思考ツールの活用を図っていく。(各教科での活用)

着眼①

・学年ごとの概念的思考に基づいた新カリキュラムを、アクティブ・ラーニングの視点で確立する。

これまでの新カリキュラムに基づき、公開授業場面の検討を行い、実際に1単位時間の評価、そしてこの新カリキュラムの有効性があるかを検証した上で、アクティブ・ラーニングの視点でカリキュラムを確立する。 (探究活動のステップの中で、資料の活用力を向上させていく。)

検証する方法としては・・・アンケートやパーマネントポートフォリオ等を活用していく。

着眼②

・考えを深め合い生かし合うため、思考ツールを活用した場の指導の工夫と、その系統性の確立

…思考ツールを活用

- ・必然性 (ツールを使うことが目的になっていないか) ・整合性 (最適な思考ツールか) ・簡便性) わかりやすいものか ・充足性 (経験をしているものか) を満たしているかの観点で、思考ツールを使っていく。

- ①教師が用意
- ②子どもが自ら思考ツールを選んでいく
- ③子どもが複数の思考ツールを使う
- ④子どもがオリジナルな思考ツールを開発して考える
- ⑤子どもが思考ツールを使わずに考える。



・ポートフォリオを効果的に活用する授業の改善

ワーキングポートフォリオ…整理見直し、振り返り、評価

パーマネントポートフォリオ…評価整理、取捨選択できるように。

・児童の実態(変容)調査 (11月) に行う予定…全国学力状況調査の質問紙を基にまたはパーマネントポートフォリオ、アンケートを基に。

<これからの研究に関して>

- ・見通す学習 (学習計画の充実)
- ・話し合う活動 (練り合い) の充実
- ・振り返り学習の位置付け
- ・協同学習を意識した探究活動
- ・教科との関連を意識した単元構成